



ALPS

CAREER

>>> 仕事

私のキャリアデザイン 第4回

放送大学が背中を押してくれた。
仕事も、子育ても、介護も、
学びも、あきらめない人生を数年前には想像できなかった
今の私

私は、今、62歳、女性、単身生活をしつつ東京で大学教員をしています。所属する大学では教育開発機構という部署の副機構長として、大学の教育改革推進のために全学教職員と共に様々なアイデアで新しい時代に向けた教育づくりに挑んでいます。また、授業改善や教育力向上を支援するための研修を担うFD (Faculty Development) 推進センター長も任されています。大学からの研究費に加え外部のいくつかの競争的資金もいただいております、教育をテーマに充実した研究活動を進めています。一方、外では複数の研究チームに属し、それぞれの研究成果を社会や教育界に活かす実践的活動もしています。最近では、東京都の教員研修や企業の教育担当者研修など、色々な機関から講師を頼まれることも増えてきました。

さて、ここまで読んだ皆さんは、どういう経歴の私を想像されるでしょうか。実は私の今の姿は、つい数年前まではそれまでの私を知る誰も、いえ、当の自分自身ですら、想像できなかった人生展開の結果なのです。

55歳まで、私は北陸の山間にある小さな村で築100年の古い農家を改修した家に住み、車で40分のところにある母校の工業高専で35年間、技術職員をしていました。15歳で工業高専に入學し平凡な成績を修めて20歳で卒業し、そのまま母校で働き始め、22歳で親が勧めた結婚をして2人の娘を授かり、お嫁さんとしてお姑さんに仕え、働きながらボランティア活動をして、やがて離婚し家を買った子どもたちを育て上げ、母を見送り…そして、55歳の時に次のステップを見つめるため職場を辞めました。

それから7年、今は大学教員としてとても充実した心豊かな日々を送らせていただいています。

3つの「私らしさ」を大切にしたこと

このように文章にしてみると平凡な人生でしたが、還暦を過ぎてから今の働き方に至ったことと無縁ではない「私らしさ」を挙げるとしたら、次の3つが浮かびます。

1つ目は、「常に目の前にあるその時にすべきことに自分なりに一生懸命取り組んできたこと」です。下手でもゆっくりでも認められなくても、焦らず無理せず楽しみながら「自分がすべきこと」に取り組む姿勢は、生活がガラリと変わった今も変わりません。そして2つ目。私は、娘を授かり育てる中で、この子たちが幸せに暮らせる社会になつて欲しいと願い始めました。そして、親の世代から引き継いでこの手の中にあるバトンを、次の世代、そのまた次の世代に渡したい、とだんだん考えるようになっていきました。「こんな社会になつて欲しい」で



東京都市大学 教育開発機構 教授
伊藤 通子

。【いとう・みちこ】富山工業高等専門学校(現富山高等専門学校)技術専門員、東京大学大学院新領域創成科学研究科 特任研究員、NPO 法人 持続可能な開発のための教育推進会議 事務局長を経て、2017 年から現職。研究テーマはProblem/Project-based Learning。

>>> 私のキャリアデザイン

はなく「こんな社会をつくりたい」と強く思っている、それが2つ目の私らしさです。

やがて「公教育のあり方」について真剣に考えるようになり、もっと情報が欲しいという欲求が出てきました。子育てや母の看取りなどを終えた52歳の時、大学を卒業し、続いて大学院の修士課程を修めたことで3つ目の私らしさ、「主体的に学ぶことの喜びを知りずっと学び続ける」という自分になりました。

私のような普通の人生を歩む普通の女性の背中を押してくれて、誰にでもある「私らしさ」を今の仕事に結実してくれたのが、全ての都道府県にあつて誰にでも門を開き、いつでもどこでも自分のペースで学べて学位が取得できる放送大学という学びの場でした。

●●●●●
「一生懸命取り組むと生まれてくる「？」にこだわってみる」

「目の前のすべきことを一生懸命やる」というのは、田舎の素朴な文化や、実直な両親が育ててくれた性質だと思えます。どんな小さなことでも誠実に取り組んでみると、意外な面白さに引つ張り込まれ無我夢中のスイッチが入る瞬間があります。その時に必ず小さな「？」が生まれます。それにこだわって解決しようともがいていると、気付かないうちに次の局面がひらけてくるのです。家庭をもち家事スキルを鍛えるべき時、地域住民として責任を果たすべき時、

子育てをするべき時、親との時間を大切にすべき時：自分が選択した生き方の結果として与えられる使命は人それぞれですが、私の場合はいつも「？」を大切に取り組んできました。それは仕事も同じでした。

仕事に就いて初めの頃は、化学や物理が好きではなかったため技術職員という仕事が嫌で嫌で、何度も辞めたいと思いました。ちょうど第2次オイルショックの煽りを受け就職難の時代に卒業したのですが、家では封建的な両親から「女の子に学歴はいらない」「結婚こそが幸せ」「長女は婿をとって親と暮らし少しでも働いて家計を助ける」「安定している技術職や学校職員が一番」と刷り込まれて育ったので、現代のキャリア教育の先生が聞いたら腰を抜かしそうな「イイ加減な気持ち」で就いた仕事、おまけ



現在教鞭を執っている大学では、学生たちが専門家として地域でできることを見つけ行動するPBL (Problem/Project-based Learning) の授業を行っている

に化学や物理がダメな私にとっては全くミスマッチな職業でした。

けれども日々、真面目に取り組んでいると、私と同様に自然科学が苦手な学生が少なからずいることがわかってきて、技術職員としてどうしたら少しでもわかりやすく楽しい実験になるのかを考え始めると、仕事に少しずつ面白くなってきたのです。苦学生には学びやすく、得意な学生にはさらに理解が深まるような教え方を工夫することに夢中になっていきました。

●●●●●
「自分が面白いと感じることは手放さない」

周りからは工学を究めることこそが将来の道を拓くと幾度も諭されましたが、工学は一向に勉強しないので呆れられ「出世しないぞ」と脅される（！）こともありました。でも、自分が面白いと感じる「教え方の工夫」で学生たちが「わかった！」と笑う顔を見る喜びを手放す気にはなれませんでした。

そのうちに私には、私がやるべきことが見えてきたのです。工学博士（学者）である教員と、教育方法を工夫する私がチームを組むと、授業や実験がとても効果的に行えることがわかってきたからです。

やがて、実験だけでなく講義型の授業もよりわかりやすく改善したい先生方から支援依頼が来るようになりました。仕事上で次々に生まれる疑問への本質的なヒントが海外の教育事例にあることを知ったのもこ



五感をフルに使って学ぶワークショップ形式での授業



学生の主体性を引き出す授業を同僚の教員とデザイン

の頃です。子育ての超多忙期が過ぎ30代後半になっていった私は、仕事と家庭の時間をうまくやり繰りして欧米の教育に触れることができる社会活動に参画し始めました。しかしながらボランティア活動という概念が市民権を得たのは1995年の阪神淡路大震災以降ですから、まだまだこの頃は社会活動は本業を疎かにすると考える人が多く、さらに女性は子育てと家事だけに専念すべきと、職場からも保守的な両親からも逆風は吹いていました。

しかし、すでに「小さな問い」と「ささやかな解決」のスパイラルは始まっており、一つ一つの問いを解決するにつれ、大きくなっていく竜巻のように教育への興味関心が立ち上がっていくを感じていました。

●●●
**娘の存在が、さらに思いを深くし
視野を広げてくれた**
●●●

1980年代後半に2人の娘が生まれると、命への愛おしさと共に、この子が生きていく社会はどんなふうになるんだろうか、と考えることが多くなりました。

それまで当然のことかと思ひ込んでいた女性としての社会的規範や慣習に、だんだんと違和感を抱くようになってきたのです。幼い頃から女性らしく良妻賢母という型への順応を強いられ、伝統的な結婚観やジェンダー観の中で生きることが、私にとって苦行になってきていました。しかしそれを教師や両親からは愛情をもって示された

ため期待に沿えないダメな自分を自己否定し、夫や婚家先に対してすべきことよりも仕事や社会活動ですべきことに夢中になる自分は不心得者なんだ、と自分を責める負の感情で押しつぶされそうでした。一方で、その中から頭をもたげてきた力強く明るい新しい感覚もありました。

社会活動の中で、欧米の優れた教育書の訳本に出合い仲間と学び合ううちに自分の中に学び方・教え方革命が起こり、その明るい感覚は自分が受けた教育への批判的な感情とシナジーを起こして、娘たちや若者に私とは異なる教育をしようという未来への希望になっていったのです。

●●●
**新しい時代にふさわしい公教育
への希求**
●●●

この時代は、世界の科学者が人類社会の未来に対して警鐘を鳴らし始めた時期でもあります。「持続可能な開発」という概念が国際的に合意されたのが1987年、次女を授かったまさしくその年でした。持続可能な世界へと変えていくという時代の潮流の中で私には、「教育」からのアプローチで未来に向けた社会づくりに参画したいという強い意思が生まれ、目指す教育の方向が見えてきたのです。

それは、欧米で当たり前になっていた「一人ひとりの可能性を伸ばす教え方」、そして「予測困難な未来社会を生きる力を育む学び方」でした。学生時代の私にとって勉強

は一人で取り組む辛い暗記作業で、苦手な科目を克服して人より1点でも多く取り、1つでも順位を上げることが目的でした。学校での勉強は、どう自分らしく幸せに生きるかを追求する営みとは切り離されていきました。私は、娘や学生たちに欧米、特に北ヨーロッパで実践されているような公教育を与えたいと強く思うようになりました。

●●●
放送大学との出会い
●●●

それからの10年間は、欧米の教育実践書を読み、先進的な教育NPOに参画し、内外の色々な学校を視察しました。新しく得た知見を教員とのチームティーチングに取り入れ、学生たちが力を付けていく過程に伴走するのは本当に楽しいものでした。家庭では娘たちに一度も「良い成績を取りなさい」と言うことなく、多様な文化や考え方に触れさせ、実際に体験して考える場や時間を多く与えるようにして育てました。私が何かを働きかけることで、職場では学生たちの、家庭では娘たちの成長を、小さな変化として実感することが私の喜びでした。

しかしながらそのうちに、超えられない壁のようなものを自分の中に感じるようになっていきました。うまくいかない時に読んだ欧米の教育書の中に手掛かりとなるであろう理論を見つけても理解が追い付かず、試行錯誤の繰り返しで経験的に得た知見を残したくても適切な言葉を知らず暗黙

>>> 私のキャリアデザイン



それぞれの道で頑張る娘たち家族と、故郷の家に集まり囲炉裏を囲む



企業に招かれ、安全教育についてプレゼンすることも



海外の優れた教育実践を調査

知として埋もれていくのです。実践報告は説得力を欠いており知識や論理構成の欠如を痛感して「教育学を学びたい」と思うようになっていきました。しかしその頃、母にステージが進んだ癌が見つかり闘病のサポートを余儀なくされる生活になったため、最後の親孝行になるだろう予感が頭をよぎり、学びの優先順位は高くなりませんでした。

そんな時、知り合いが放送大学で学んでいることを偶然耳にしました。調べてみると、通学せずに教育学を体系的に学ぶことができ、スクーリングや試験も自宅近くの大学で受けられることがわかりました。県外で学生をする次女への仕送りはありましたが、自分の学費も捻出できそうでした。過酷な受験もなかったため軽い気持ちで入学を決め、自宅で、放送大学の学習室で、時には病院のロビーや母のベッドの横での学生生活が始まりました。

人生で初めて気付いた学ぶ喜び

間もなく、想像もしなかった凄じくことが起こり始めました。それまで存在さえ知らなかったような科目の教科書をカリキュラムに従って読み進めるうちに、まさしく雷に打たれて体中に電流が走るような衝撃を受けたのです。どの教科書を読んでも、自分がこれまで実践してきたことと教科書にあることが、バチッと音を立ててつながるのです。私の中にバラバラにぼんやりと存在

していた知識や経験が、まるで欠けていたパズルのピースが見つかったように、どんな目に見える形になっていくのです。頭の霧がスーッと晴れていき、新しい世界が現れたような感じでした。

こんな体験は初めてのこと……いえ、そういえば小学生の頃、ツルカメラ算に感動した時以来……ヘレンケラーの伝記を読み終えて顔を上げた時に見えた景色、それは努力で変えられる世界なんだと感じた時の高揚感、あの時以来かもしれません。

そういうワクワクとした時間はあつという間に過ぎて学士を授かり、縁がないと思っていた大学卒業の喜びがこみ上げました。さらに修士課程の入試に挑戦して合格、今度は、自分の教育実践を論文としてまとめるために、積み重ねた経験を理論づけたり分析したりする2年間となりました。

母から私へ、そして子へ孫へ

その春、母は他界しましたが、できる限りの親孝行ができた安堵感と支えてくれた人々への感謝の気持ちで送ることができました。修士号の修得を伝えた時、ベッドの中の母は、喜ぶ私を不思議な表情でじっと見つめていました。私は52歳になっていました。逝くちようど2週間前に、私の初孫、母のひ孫が娘に宿ったことがわかり耳元に伝えると、母は突然、目を見開き、周りにいた家族一同が驚くような力のある声で「男

がいい!」と言ったのです。母もまた、私には古い規範を強いながらも、女性であるがゆえに受けざるを得なかった何らかの理不尽さを訴えたかったのか、今となっては確かめることはできません。でも私はこの時、決心を再度、新たにしました。初孫が男であれ女であれ、「学びの喜び」をバトンタッチしよう。と。「学ぶことが人生を豊かにしてくれる」ということを私なりに伝えていこうと。

こうして修士として実践を語り論文を書くようになったことが、その後の私の人生を大きく変えていくことになったのです。

私の「小さな問い」と「ささやかな解決」のスパイラルは、今も続いています。与えられたミッションに一生懸命に取り組んでいると新たな課題が立ち上がり、これまでの経験に新しい知見を巻き込んで、太い柱となって私の人生を支えてくれるのを感じます。実は、今、また放送大学の学生に戻り博士論文に取り組んでいます。3度目の放送大学では、今の私だからこそできるテーマの研究に挑戦しています。新たに立ち上がってくる問いの解明に向けて、社会で活躍する卒業生、放送大学の先生方や研究仲間の力を借りて進めています。近い将来、故郷に戻って始めたい仕事もあります。誰にもある「自分らしさと可能性」を大切に、どんな方法であれ、いつからであれ「学び続けること」が、豊かな働き方や人生への道になっていくと信じています。